

# アフリカをどう教えるか

藤沢総合高校 石橋 功

## はじめに

世界史の授業でアフリカを教えようとするとき、いざ授業を行おうとすると多くの困難に直面する。生徒はアフリカという存在を知らない。知っていたとしてもマイナスイメージしか持っていない。さらに生徒に奴隷貿易のアフリカ、帝国主義の犠牲者を強調して教えることはマイナスイメージを拡張するだけになる。アフリカ＝暗黒大陸・貧困・饑餓・エイズ等々といったイメージではないアフリカ像をどう造っていくかという授業を模索してみたい。授業実践は世界史夏期講座で栄光学園の生徒対象のものと藤沢総合高校対象の（本稿末ページのプリント）二枚のプリントを用意した。

## 一 イスラームとアフリカ

古代エジプト文明でオリエントの延長上に紹介されたあと、次に登場するのはアフリカのイスラーム化である。ここでは西アフリカと東アフリカのそれぞれのイスラーム化に焦点をしばって授業展開してみた。

西アフリカのイスラーム化は、ガーナ王国以降のマリ、ソンガイ王国のイスラーム化と、ガーナ王国を攻撃したムラービト朝、ソンガイ王国を滅ぼしたモロッコをからめて展開させる。この地域に産する金の存在が繁栄の根拠となったこと、またトンブクトウが繁栄の中心としてヨーロッパ人のあこがれの地であったことも押さえる必要がある。もちろんマリ王国の王マンサムーサのエピソード

の紹介も生徒の興味を引くのではないだろうか。

東アフリカのイスラーム化は、インド洋交易の観点から押さえないければならない。アフリカ東岸を押さえた国が西インド洋交易の利を独占するという点から考えれば、ムスリム商人が東アフリカのイスラーム化をすすめ、マリンディやキルワが発達したことを押さきたい。特にキルワはイブン・バットウタが世界一美しい街と指摘したこと、天正遣欧使節団が日本人で初めてモザンビークを訪れたことなどをエピソードとして紹介することは重要である。またイスラーム文化と現地の文化が融合してスワヒリ文化が発生し、現在もスワヒリ語が東アフリカの主要な言語になっていることも落とすことができない。

西アフリカと東アフリカの繁栄を教えることによって、近世以前のアフリカはヨーロッパに比べて遅れた地域ではなく、むしろ栄えていたという事実を伝えることが必要なのである。ところが、奴隷貿易によって主要な生産者たるべき労働力を奪われたアフリカは他の世界地域に対して経済的に後退していったことは否めない。つまり欧米人の奴隷貿易がアフリカの貧困の始まりであると指摘することが重要である。また奴隷貿易が構成するいわゆる三角貿易では、アフリカに雑貨やラム酒が運ばれたなどとアフリカを落としめるような記述がかつて記されていた。しかし三角貿易とはインドの綿製品が中心であったと教えることによって、インド交易の主導権争いに勝利したイギリスが奴隷貿易にも勝利したことを強調したい。さらにその富を産業革命に振り向けたイギリスが世界の覇権国家となっていくことを示すことで、アフリカをめぐる世界史の近世史ができればいい。

## 二 帝國主義進出とアフリカ

一九世紀後半にはアフリカは列強により分割された。教科書にはアフリカ全図が描かれその植民地化が書かれる。ところがどの教科書も進出の明確な理由が示されていない。なぜ一九世紀後半アフリカに欧米諸国が急に進出しはじめたか。そこは世界中で用いられている商品の原料供給地と商品市場への欲求ということで語られるが、それ以上の説明はされないのが普通である。

欧米人がアフリカに求めたのは油ヤシとピーナッツであった。油ヤシは石けんの原料であり、ピーナッツはマーガリンの原料としてあった。この二つはこの時代に急増する都市労働者の生活に必要な生活用品である。この供給にヨーロッパは迫られていた。つまりところヨーロッパ人は油ヤシとピーナッツのためにアフリカを植民地化したのである。このような「忘れられてしまった」モノとしては鯨油が有名である。一九世紀、ランプ照明に必要不可欠であった鯨油であったが、電灯の発明で不用となり、日本の開国を求めたアメリカのことも直截なきっかけとなったのに、それが忘れられていく。そして今、鯨を取りに来ていたアメリカ人が、鯨を捕る日本人を攻撃している。

なぜ一九世紀後半に欧米が世界に進出したかと言えば、この世紀後半に医学が急速に発達したことを指摘しておく。マラリヤ等の風土病は、ある意味ヨーロッパ人のアフリカ進出をくい止めていた。しかし次第に病気は克服されていった。これに関してはロックフェラー財団をスポンサーとして活躍した野口英世が黄熱病のためアグラで亡くなったエピソードを挿んでおきたい。

欧米のアフリカ分割そして支配こそが現在までのアフリカ社会

の停滞を生む最大の原因となっている。

第一に現在のアフリカの国の国境線は基本的には植民地の境界線がもとになっている点である。アフリカの国民国家は造られた国家であるゆえに部族間の対立を内包しているケースが多く、しかも欧米人が植民地支配するとき、少数派の部族を利用して多数派の部族を支配した例がよくあり、その反動が現在に引き継がれ、部族間対立が絡む内乱が絶えないことなど見ておく必要がある。アフリカによく見られる直線的な国境線などからその意味を考えさせるなども一つの方法かもしれない。

第二は、世界各地共通の問題であるが、欧米人はアフリカでプランテーションを展開した。それは当然その国の経済がモノカルチャー依存の国となり、そのあげく商品価格の下落による貧困化を呼び込む原因となっている。

最後にこういったアフリカの停滞をすべて欧米人のせいにする独裁的な指導者がしばしば出現し、大衆の支持の下、恣意的支配が横行して合法性が失われている国家が多くあることである。

## 三 モノを中心とした世界史の展開

生徒に世界史への親しみを持たせるために、モノⅡ世界商品を中心に世界史を語ることは重要な手法の一つであると考える。胡椒、クローブ、ナツメグ、シナモンといった香辛料が世界商品であった時代、これを求めて大航海時代が始まった。そしてポルトガルが一六世紀にアジアの香辛料をヨーロッパに直送することに成功した。しかし、ポルトガルはムスリム商人との香辛料貿易の競争に敗れ没落していく。これに代わって一七世紀にはオランダが胡椒の産地ジ

ヤワを、クローブ、ナツメグの産地モルッカ諸島を、シナモンの産地セイロンを押さえて香辛料を独占し、最初の覇権国家となった。

香辛料価格が没落して世界商品でなくなると、次の世界商品になった砂糖、コーヒー、キャラコ、そしてこれにリンクする奴隷貿易をめぐってイギリスとフランスが争い、イギリスがこれに勝利して一九世紀の覇権国家となっていく。いくなれば奴隷貿易の富によって産業革命を成し遂げたイギリスは、次なる世界商品である石炭、鉄鉱石を求めて世界中を探しまわるのである。

一九世紀後半から二〇世紀前半に起きた戦争の原因のひとつは石炭と鉄鉱石であった。この二つの資源を有する満洲に日本が進出したのはいわば当然といえるかもしれない。二〇世紀中盤からは、石油が世界商品となった。第二次世界大戦を石油という視点でみると、戦争の本質的部分がかなり見えてくるに違いない。

こう見てゆくと、石油や石炭のような政治的に重要な世界商品ではなかったが、油ヤシとピーナツでアフリカ史を考えるのも一つのアプローチではないか思う。

#### 四 アフリカの今

アフリカの現状を紹介する書物が昨年二冊発行された。ひとつは岩波新書「アフリカ・レポート」（松本仁一著）で、ここでは現在のアフリカの状況を丹念に追っている。最近の新宿でアフリカ系外国人が急増している現状を描き、その理由をさぐるなど非常に興味深い。この本にあるようなアフリカとの縁をきっかけに現地アフリカに骨を埋める覚悟で貢献した人々の紹介もある。こういった分野に活躍する日本人も増えてきている。もう一冊は岩波ジュニア新書

「アフリカの今を知ろう」（山田肖子編）。アフリカの何を日本の子どもたちに教えるべきかの指針を与えてくれる書である。

しかし一般的には、このような真正面から偏見なしにアフリカをえがく作品はまだマイナーである。「ホテルルワンダ」のルワンダ、「キングオブスコットランド」のウガンダ、「ブラッドダイヤモンド」のシエラレオネ、「ブラックホーク・タウン」のソマリアといった現状を「断片的に伝える」映画のほうは、アフリカを紹介するものとしては圧倒的に多い。こうした作品で紹介されるアフリカは白人のフィルターを通したアフリカのイメージである。

われわれ日本人にとっても、かつての「イスラム史」理解は「白人の目」フィルターを通したものであった。歴史を学ぶにしても「マホメット」と「サラセン帝国」のイメージであった。現在の「イスラム史」は見方が一変している。この経緯を考えると今後のアフリカ像も変わっていくのではないかと考える。遠くて関係なかったアフリカであったが、今や多くの人々の到来で近くなりつつある。ここでアフリカを開発教育だけではなく歴史教育からも教える視点が求められている。

#### 五 教えずすぎる日本史、教えなさすぎるアフリカ史

神奈川県は今年から県独自に日本史の必修化を決めた。日本史は小学校と中学校で通史の学習が二回なされている勘定になる。高校の限られた時間割のなかで生徒にこれ以上の時間を課すのか。そしていったい何を教えるのか。というのが素朴な疑問である。

そもそも「日本Ⅱ 国民国家日本」は明治以降の人為的創造物であり、「日本列島に住む人Ⅱ日本人Ⅱ大日本帝国臣民Ⅱ日本国民」で

は決してない。

一九世紀のヨーロッパで、国民国家としてフランス、ドイツ、イタリアが成立していくなかでフランス語、ドイツ語、イタリア語が形成された。この延長上に国民国家日本と日本語の成立がある。日本だけが他国と異なり有史以来独自の国家として存在してきたと考えるのは無理がある。その無理を承知で「日本国民の常識」大人たちが習ってきた日本史「国民意識の形成」を背景に小中学校の日本史が成り立ってきた。高校で日本史を必修化するなら、こうした国民国家日本を「演出」するため日本史が明治以降の時代に作られてきた経緯と必要性を学ぶことが必要で、大人たちが習ってきた「日本史という構造」を教えるべきであろう。こうした議論になると日本史の先生方は文字資料を示して、日本という意識をかなり前から持っていたというかもしれない。しかしその資料は当時の支配者層のものである。ペリー来航を承知していた江戸幕府官僚層は、とくに日本をとりまく状況を理解していた。ただ彼らは当時の日本人のほんの一部であつたはずだ。

ただ学校で日本史は学校で教える教科である以上、できない生徒が存在する。だからといって同じ内容を何回も繰り返すことに意味はあるのだろうか。

これに対してアフリカを学ぶということは、「地理」が選択科目であるため、ほぼ必修の「現代社会」の南北問題の項で「貧しいアフリカ」を学ぶ機会しかない。世界史で学ぶとしても最初に述べた程度しか勉強しない。こういった中で、いわば日本と対極のアフリカを「開発教育」のなかで学ぶことはそれなりに意味がある。「経済発展」幸せの到達」という構造に疑問を投げかける開発教育が教

材としてアフリカを扱うのは当然のことであるし、自分たちからほど遠いアフリカの現状に対して関心を持つ生徒を育てるところにグローバル化への真の対応があろう。

## 六 世界史は外国の歴史？

昨年末、高等学校の指導要領の改訂が行われた。今と同じく世界史のみが地歴科目の必修である。神奈川県教育委員会はこれに先立ち独自に日本史必修化を発表し、二〇一三年から神奈川県では世界史と日本史が必修化される。必修化の根拠は「自国の歴史を知らない生徒が多い」「他国の歴史を学ぶ時間があつたらまず自国の歴史を学ぶべきである」との風潮にあるようだ。だが、どうやら県教委の言う「世界史」とは必修化される前のおよそ三〇年前の「世界史」のようだ。すなわち日本史と切り離された外国史中心の「世界史」である。現在の世界史は日本史を組み込んだ世界史であり、小学校、中学校で学んだ日本中心の日本史でなく、世界から日本史を学ぶスタイルを取っている。文部科学省が中学校で学んだ日本史をさらに詳細にする高校日本史を必修化しなかつたのは当然のことであつた。グローバルな国際社会の時代に、普遍的に「日本」があつたような一国的日本史が世界に通用するはずがないのであつて、子供の成長過程を考えた場合に、高校では世界史の中で日本史を学び、さらに大学等では日本という特異な国民国家の性格を学ぶのがふさわしいと多くの歴史研究者が考えるのも当然のことである。こういった当然のことがどうして通らないのだろうか、そこにはやはり「世界史は外国の歴史」というイメージが歴史研究者、高校の世界史教員「以外」の人々に根強く残っているからであろう。

三〇年前の高校現場の授業と、現在のそれは一見するとそれほど変化がない。ゆえに三〇年前の「世界史」のイメージが現在も生き残っている。変化がない理由は大学受験の世界史の問題が、三〇年前の問題とそれほど変わらない外国の事件史中心のものが多く、それもかなり細かい知識を問うからである。受験校で教えるのと良心的な世界史の教師はまずそういった細かい事件史を教えるので、日本から離れた外国中心の「世界史」が成立する。また受験に関係ない高校では生徒は外国を知らない。そこで世界史以前に外国の紹介をする授業が必要になる。といっても紹介する外国とはアメリカ合衆国、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、イギリス、フランス、ドイツ・。この国々がどこにあり、首都はどこであり、どういった国かといった基礎的学習が中心になる。しかも授業を受けた生徒には「世界史は外国を学ぶ授業」というイメージだけが残る。そもそも現在小学校、中学校で世界の国々をトータルに地理で学ぶという事はしていない(中学校で世界の五か国を選んで学び、その学びの手法で「自ら世界の国を知る」のであるが、多くの中学生は勉強した五つの国のことしか知らない)。われわれ高校の世界史教員の多くは、地理こそ必修にして学ぶべき国々の位置くらい知ってから世界史を受けてほしいと感じている。しかし、外国の国々の存在も文化も世界史のなかで学ぶというのが指導要領の着想なので、地理必修化という三十年前のことを世界史教員は言わないのである。

## おわりに

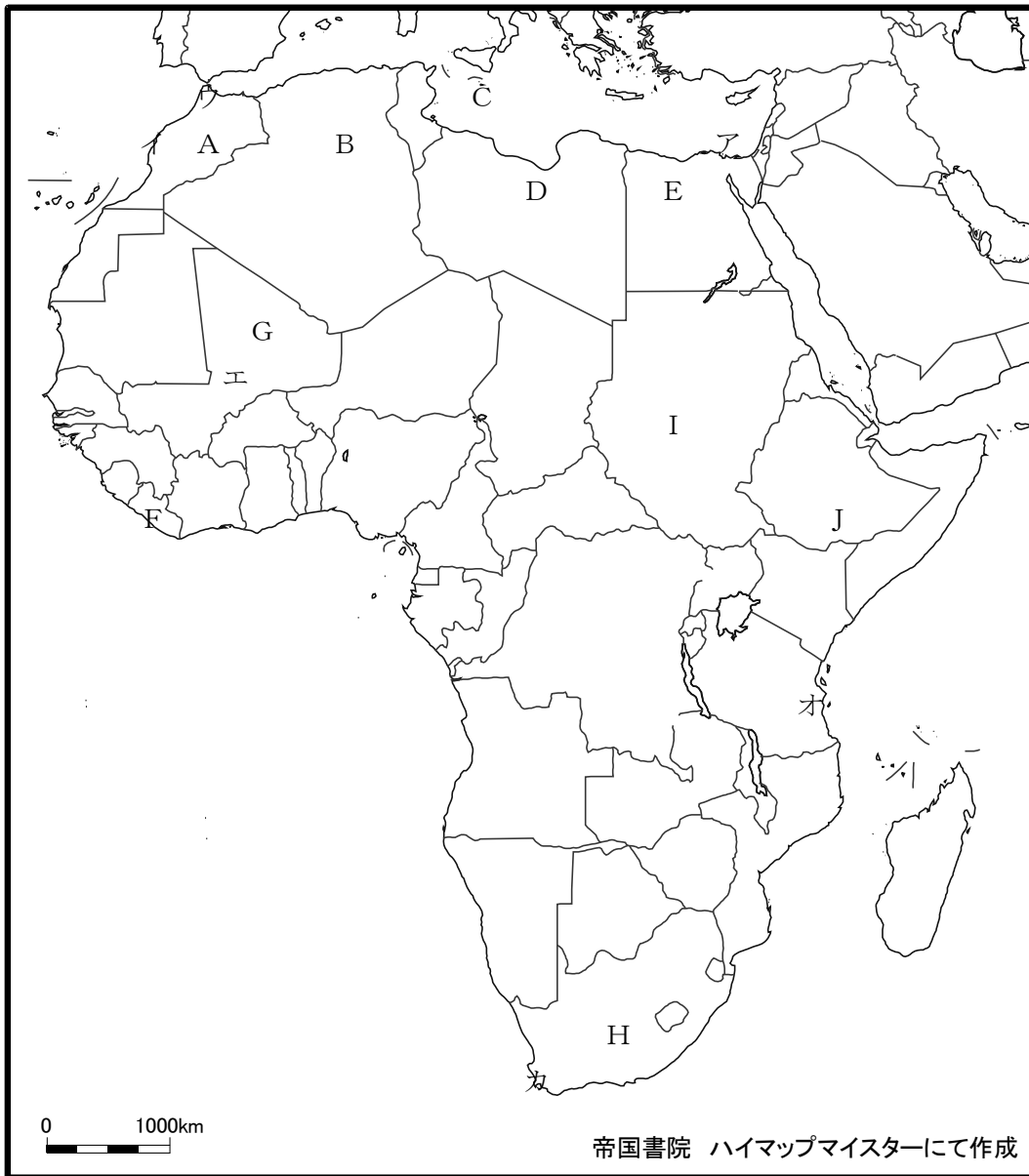
アフリカを世界史でどう教えるかというテーマにもかかわらず、日本史に対しての私論を述べることになったが、高校の世界史では

アフリカを教える時間は非常に少ない。だからこそアフリカのことを学ぶ生徒のアフリカ観を決めてしまう危うい時間ではある。もちろん同様にオセアニアや太平洋、中南米、カナダ等の共通の問題である。

世界史は、日本も関係する世界の歴史としてとらえなければならぬが、歴史的経過から今のような世界史となった。しかしギリシア・ローマ、イギリス・フランス・ドイツ、インド、中国、アメリカ合衆国のみを学ぶような世界史はグローバル化する現在の日本社会の現状やニーズと乖離するといわれて久しい。しかし重視する史実やその史的評価などは徐々に変わってきている。そして教科書・副教材は今や地歴科の唯一の必修科目としての世界史にふさわしい内容を整えつつある。整わないのは教員サイドの教え方であり、自分が習ってきた世界史と同様の世界史を生徒に教えようとしている。昨年「世界史をどう教えるか」で自己批判した私たちであるが、アフリカのようなところをどのように教えるか、さまざまな実践例を必要としている。

## 《参考文献》

- 「新書アフリカ史」講談社新書 一九九七
- 「世界の歴史二四 アフリカの民族と社会」中央公論社 一九九九
- 「アフリカの今を知ろう」岩波ジュニア選書 二〇〇八
- 「アフリカ・レポート」岩波新書 二〇〇八
- 「開発教育五五 開発教育と市民性 小特集アフリカと日本」  
開発教育協会 二〇〇八



- 問1, A~H までの現在の国の名を記せ。
- 問2, ア~カ までの都市名を記せ。
- 問3, A~H の国が世界史にどう登場したか確認しよう。
- 問4, ア~カ までの都市が世界史にどう登場したか確認しよう。

# 世界商品と覇権国家の変遷

クラス( ) NO( ) 氏名( )

## I、有史以来の世界商品

中国の(1 )とインドの(2 ) 2はキャラコと呼ばれた。日本は世界中のあこがれの国だった。黄金の国ジパングであり 19 世紀まで世界の通貨であった(3 )を産出していたからだ。

ヨーロッパ人は有史以来アジアの香辛料を珍重していた。特にインドの(4 )、モルッカ諸島の(5 ) (6 )を求めた。

## II、大航海時代

香辛料を求めて、特にインドとモルッカ諸島と日本をめざした。東回りでいこうとしたのはポルトガルであり(7 )が 1498 年にインドに到達した。アメリカ大陸の存在を知らないスペインは西回りでインドをめざした。(8 )年(9 )はアメリカに到達、ここをインドと信じて西インド諸島と名付けた。スペインの(10 )はアメリカの南端を回りフィリピンに到達、ここをスペイン領とした。この結果、現在フィリピンは(11 )教の国である。彼はこの地で亡くなったが彼の部下はこの後スペインに帰国、結果として世界一周を行った。

この大航海時代の結果、新大陸アメリカは主にスペインの植民地化がすすみ、現在も中南米はスペイン語圏である。ただ(13 )はポルトガル語、(14 )はフランス語、(15 )は英語の国である。

アジアにはこの結果主にポルトガルが進出、インド洋と太平洋の中継点(16 )は 1511 年以降ポルトガル領となり 1543 年日本にも来航する。

## III、オランダの覇権

オランダがヨーロッパで NO1 の国に

オランダはコショウの取れる(17 )を領有、クローブ、ナツメグの産地の(18 )を領有、さらに銀の最大の産出国(19 )貿易を独占した。さらに大西洋とインド洋の中継点(20 )とインド洋と太平洋の中継点(21 )を領有して海の道も押さえた。

しかし 1650 年を境に香辛料の価値の没落によってオランダは衰退していく。

## IV、イギリスとフランスの対立

あらたに世界商品となっていくのがインド産綿製品の(21 )と中南米産の(22 )と(23 )であった。22、23 をイギリスはジャマイカで、フランスはハイチでつくった。この両国はアフリカに(21 )を運び、アフリカからアメリカに(24 )を運び、アメリカから 22、23 を運ぶ大西洋三角貿易を争った。この抗争は(25 )年イギリスの勝利で決着する。

## V、イギリスの覇権 イギリスが世界 NO1 の国になっていく

1763 年イギリスはフランスに勝利し、インドと北アメリカを領有するようになり、インドの 21 と北アメリカの(26 )と奴隷貿易(大西洋三角貿易)を手に入れた。また(27 )と(28 )を手に入れ海の道も支配した。

これらの富を使ってイギリスで行われた最初の機械工業の始まりを(29 )とよび、(30 )工業からはじまった。